

令和4年度 京都府立東宇治高等学校学校経営計画（実施段階）
（スクールマネジメントプラン）

学校経営方針(中期経営目標)	昨年度の成果と課題	本年度学校経営の重点(短期経営目標)
自主性を基盤に、社会と関わり、課題を解決しようとする人の育成をめざす。 そのような人を「みらいを明るくできる人」と定義し、その育成のために、生徒に次の姿勢を身に付けさせる。 (1) 挑戦する姿勢 (2) 周囲と関わる姿勢 (3) 努力し続ける姿勢	昨年度は、NEXT会議が提言した個別最適な学びを具体化する開始の年度とした。生徒のさらなる減少を抑えた山城通学圏における東宇治高校の在り方を熟議し、本校の特色ある取組について中学生、保護者、地域に広く理解を促し、かつ在校生が充実感を持って学校生活を送るための教育活動に組織的に取組む。	中期経営目標に掲げた「みらいを明るくできる人」の育成、及び「3つの姿勢」の涵養のために、本年度は次の目標に重点を置く。 (1) 人権意識と社会性の涵養 日々の教育実践が、人としての基本を身に付け、互いの人格を尊重し、人権意識を備えた人材の育成の場であることを常に意識する。 (2) 授業改革 学習指導要領に基づき、「知識・技能の習得」を礎に、「自ら学ぼうとする力」や「知識を活用して問題を発見・解決する力」を育成するため、ICT機器の活用を踏まえた不断の授業改革を行う。 (3) キャリア教育と進路指導 社会への貢献、社会とのかかわりを意識づけるキャリア教育を進めるとともに、高大接続改革などに対応した丁寧な進路指導を一人一人に行う。 (4) 外部機関との連携 大学や地元小中学校、地域の団体などとの連携を深め、グローバル社会・地域社会で活躍するための素養を醸成する。 (5) 総合的な探究の時間 「国際教育と地域連携をテーマとした探究学習」の研究をさらに推進し、「総合的な探究の時間」運営に注力する。 (6)働き方改革 ICTを活用した教科・分掌等の業務内容の効率化や会議の精選を行い、教職員が生徒と向き合う時間を確保しつつ、ライフワークバランスを踏まえた働きがいのある職場環境を整える。

重点目標

＜分掌・領域＞

A:十分達成できた B:ほぼ達成できた C:あまり達成できなかった D:ほとんど達成できなかった

領域	重点目標	短期経営目標達成に向けての具体的取組	評価	成果と課題
組織・運営	分掌間及び教科間の連携・協働	本校の教育目標の実現に向け、各分掌部長及び教科主任が主たる調整役となって、関係する分掌及び教科と連携・協働し、効果的・効率的に業務を遂行する。	B	・起案文書については関係する分掌部長、教科主任に回議するよう改善し、連携、協働の推進を図る一助とした。しかし、計画的に事前の調整、連携がさらに推進されるよう工夫したい。
教務部	新学習指導要領に基づき、年次進行で観点別評価・シラバス等の検討	新学習指導要領に基づき年次進行で、観点別評価等の検討を行う。授業改革として、授業参観の充実を図り、ICTの活用を推進する。また校務の改善としてICTの利活用の積極的な運用を図る。	B	・観点別評価と評定を整理して、1年生の評定を算出した。また、膨大な観点別評価を点検できるように工夫することができた。公開授業の参観については、1・2学期ともは目標達成ができなかった。2学期以降の校内公開授業も含めて活用できた。
総務企画部	魅力的な広報活動の展開	・本校Webページや学校説明会等、本校の魅力が伝わるものにするため、各分掌・教科・生徒会と協力する。	B	・昨年度に比べ、各分掌・部活動からのWebページへの投稿数は増加した。また学校紹介動画は生徒会(生徒指導部)と連携し、生徒目線での学校生活の魅力が伝わるものとなった。本校で実施される説明会については例年並の申込であった。来年度に向けて、説明会の内容・日程等を見直し、より東宇治高校の魅力を発信できるよう工夫していく。
	関連諸活動を新型コロナ感染拡大状況に対応した形態で推進する。	・広報活動において、Web等の有効活用を促進する。 ・PTA・教育後援会の運営・活動を役員と協力して円滑に行う。		・説明会等の動画配信を計画的に行い、塾の説明会への参加や中学校のLHRなどではZoomを用いた。 ・PTA行事は計画通り実施でき、文化祭では模擬店も実施した。また保護者参観は例年を大きく上回る保護者の参加数となり、多くの保護者の方々が学校に來校する機会が増えた。広報・PTA活動を通して、開かれた学校づくりに尽力していきたい。

領域	重点目標	短期経営目標達成に向けての具体的取組	評価	成果と課題
生徒指導部	・校則の見直し ・コロナ禍における生徒指導部主幹の学校行事の開催 ・学校生活と部活動における、指導基盤の構築	・BYODによる携帯電話のルールの見直し ・文化祭、スポーツ大会等の生徒指導部主幹行事の円滑な開催 ・生徒が授業等の学校生活と部活動を一貫した姿勢で取り組めるような指導体制の構築	B	・携帯電話のルールの見直しを行った。 ・文化祭を開催することができた。また事後アンケート結果から、多くの生徒が一定の充実度を感じていたようであった。 ・部活動の中でも特に運動部の生徒への指導が多くあった。また施設の使用でも不適切ところがあった。
進路指導部	生徒が進路学習を通じて、社会との関わりを意識したキャリア形成を行い、希望進路実現に邁進する姿勢を涵養するために必要な支援を行う。 生徒だけではなく教職員も高い人権意識を持つための啓発活動を行う。	学年や状況に応じた進路学習を企画運営する。また、入試に対応できる学力を育成するために各種学力テストなどを活用できる環境を整え、教科、学年部との連携を図り東宇治高校が抱える課題を共有する。さらに、令和4年度より1年生が1人1台学習用端末を持つことから、新たなキャリア教育の方法についても検討を進める。 人権啓発活動の一環として人権教育及び研修などの企画運営を行う。特に、本年度から1人1台学習用端末を持つ状況となるため、このような状況下で必要となる人権教育及び研修について検討を進める。	B	・1年生には文理選択の時期に合わせたワークショップ形式の進路学習を行い、2年生には6月に学問分野別学習会を行い、2月には希望進路先に分かれてのガイダンスを実施した。また、1年生から3年生まで、模試の分析会を実施し、課題を共有した。 ・1学期、2学期と人権学習を通して啓発活動を行った。また、教職員には、発達障害をテーマに外部講師の方に講義をしていただいた。 ・情報共有から、課題に対してどのような対策が可能か、今後の検討課題として残る。
保健部	生徒の心身の健康を守り、安心・安全な学校づくりを推進する。	・生徒の抱える心身の健康課題の多様化に対し、他分掌と連携を図りながら学校全体で組織的に対応する。 ・健康上配慮の必要な生徒や不登校傾向など様々な課題を持つ生徒に対する相談活動を充実させるとともに、健康課題の緊急性・必要性を見極め、カウンセリングを有効活用する。	B	○コロナ禍での生活3年目において、引き続き、基本的な感染拡大防止対策(特に体調管理、マスク着用・手洗い、手指消毒)を全教職員の協力のもとで行った。 ○関係者(管理職、スクールカウンセラー、養護教諭、担任)で連携を図り、健康上配慮の必要な生徒や不登校傾向など様々な課題を持つ生徒に対する相談活動を行った。 ○ゴミの分別を含む清掃活動は全般的に概ね良好な取組状況だが、ゴミの小さな回収と、廊下や階段のシミ汚れの除去と防止が課題である。
図書部	読書活動を通して生徒の情操を豊かにするとともに、広汎な知見や幅広い思考力・積極的な探究心を持った生徒を育てる。	・各教科と連携しながらメディアセンターとしての図書館運営を目指し、生徒・教職員の施設利用および図書の貸出を促進する。 ・生徒の積極的な探究活動が円滑に行えるよう、府立図書館等の相互貸借を活用し学習環境を整備する。 ・年間貸出冊数0冊の生徒の割合を全体の30%未満とし、1人あたりの年間貸出冊数8冊以上を維持し、図書委員会等の活動を通して生徒に対する読書の啓蒙に努める。 ・図書館内での様々な企画・展示およびHPを活用しての広報活動に努め、「発信する図書館」を目指す。	B	・各教科の調べ学習だけでなく、国語科が夏期課題で読書感想文に加え「POPコンクール大賞」など図書に親しみやすい課題に取り組みさせてくれたことにより、図書館の利用および貸出し増加につながった。 ・質の高い探究活動が行える支援方法および電子書籍の活用を検討したい。 ・年間貸出冊数0の生徒の割合が41.8%、1人あたりの年間貸出し冊数6.1冊(1月末)となり、次年度も引き続き読書の啓蒙を行いたい。 ・図書委員会ニュースの発行、図書館企画のHP掲載が行えた。
第1学年部	自らや集団の課題に「気づく」視点を持ち、課題について自ら解決方法を「考え」るための確かな知識や技能を身につけ、課題解決の施策を主体的に「実行する」ことができる生徒を育成する。	・生活リズムを整え、落ち着いた学校生活を送ることができるよう指導する。 ・学習用端末導入初年度でもあり、端末やICTを活用した自宅学習の習慣づけを行うとともに、人権に配慮しつつ適切な使用方法を身につけることができるようにする。 ・学校行事やクラス活動、総合的な探究の時間などをとおして、主体的に行動する力を身につける。	B	○成果 ・多くの生徒が落ち着いた学校生活を送り、各活動に主体的に活動することができた。 ・学習用端末の利活用については、授業やホームルーム活動で積極的に活用し成果を上げた。 ・心身の不調を抱える生徒については、担任を中心に適切に対応できた。 △課題 ・生活面でのルーズさが目立つ生徒がわずかではあるが増えているため、自らの生活を省みる機会を設ける必要がある。 ・学習については全体的な学習意欲の向上と学力伸長につながるためのさらなる啓発が必要である。

第2学年部	自らの力で現状を分析し、課題を発見することのできる力を育成する。また、深く考え行動することで一人一人が積極的に課題解決へと向き合う姿勢を培う。	・家庭での学習習慣を確立し、自身の目標実現に向けて努力し続ける力を養う。 ・自身の考えを述べさせる機会を設け、意見を伝える習慣をつける。 ・模擬試験の分析を通して個々の希望進路実現へ向けた学習のアプローチを行う。 ・広い視野をもって交流し、柔軟な対応ができる力を育成する。 ・ICT機器を活用した交流・学習を実施する。 ・社会の一員としての言葉遣い・振る舞いを習得する。	B	・通年の進路講演会以外に模擬試験対策や学部系統を主とした学年集会を実施し、早期対策を練る方法とその必要性を十分に実感させる指導ができた。 ・言葉遣いや振る舞いなどを通し、互いを尊重した関係を築くとともに、幅広い視野をもち交流する力を育成することができた。 ・コロナ禍における研修旅行では、国内への行き先変更を余儀なくされたが、(1)協調性を身に着け、互いに助け合う力の育成 (2)文化の継承と発展への貢献及び異文化交流によるコミュニケーション能力の育成という従来の目的を十分に達成することができた。 ・今後、学年全体でより受験生としての雰囲気作り及び、相互成長する人間関係を構築する。
第3学年部	希望進路の実現に向けて、努力し続ける姿勢の育成を継続する。将来のことについて深く考えさせる。周囲と関わるなかで、相互理解をし好ましい人間関係・生活集団の構築に取り組ませる。	・学習室の活用、進学講習の積極的受講により、自主的・計画的に学習する習慣を培う。 ・模擬試験の効果的な活用により、的確な進路指導を行う。 ・基本的生活習慣の確立・実践を継続して指導し、進路決定後も規律ある生活を送るよう指導する。 ・様々な行動様式・考え方を持つ生徒がいるなかで、各分掌と連携を取り、学年内でも連絡を密にして、適切な指導を行う。 ・学年集会や学校行事により、第3学年という集団を意識した行動をとらせる。	B	学習室を利用する生徒は、例年に比べ少なかった。大学進学を考える生徒たちは、最後の最後まで粘り強く努力した。進路実現に対する意識をより早く持たせる指導が必要であった。1年次の模試の結果はあまり良くなかったが、多くの先生方の指導や担任の指導、何よりも生徒の努力により、11名の生徒が国公立大学に合格した。日常生活については、学年を終る毎に落ち着きは見せたが、最後まで指導が必要な生徒もいた。専門学校や指定校推薦など早期に進路が決定した生徒についての指導について課題を残した。
事務部	学習環境の整備並びに希望進路実現の支援	引き続き予算の効率的な執行と経費節減を心がけ、ICT教育の充実等に必要な予算を確保、学習環境の整備も継続する。老朽化した施設設備の改修についても持続的かつ計画的に実施する。希望進路実現に向けた就学支援制度の一層の周知を徹底するとともに、丁寧な個別対応に努める。	B	光熱水費の高騰及び物品価格の上昇が続く中で、授業で使用する物品の調達や校内環境を整えるため施設の修繕に尽力した。今後も光熱水費の高騰は引き続きため、必要な物品の精査と少しでも安価となるための契約内容の検討が必要である。また、生徒の希望進路の実現のため就学支援制度の周知や丁寧な個別対応となるように努めた。今後も引き続き周知方法や丁寧な対応を心がけていきたい。

教科	重点目標	短期経営目標達成に向けての具体的取組	評価
国 語	教育のICT化や新学習指導要領に対応できるよう、積極的な授業改善に取り組む。	・「考える力」の基礎となる漢字、語彙の学習指導を丁寧に行うとともに、文章を読み論理的に考え、記述する力を養う。 ・ICT教育の具体的手法や効果的指導法を研究し、教員間での情報共有を図る。 ・学習指導要領の改訂により新たに設定された科目の研究を深め、指導と評価の一体化を進める。	B 漢字や古文単語のテストを週1回実施し、基礎事項の定着を図った。読解力や表現力を養うため、夏休みには読書課題を課した。文章表現力については、生徒間の差が顕著であるため、個に応じた指導をどのように行うかが今後の課題である。ICTの活用や新学習指導要領については、教科会議を通じて情報共有や意見交流を図った。一人一台タブレットの導入により、デジタル副教材(古典文法、国語便覧)などを用いた授業を展開し、生徒の主体的な活動を引き出すことができた。新課程においては、限られた時間の中で扱う教材が多岐にわたるため、時間配分や内容の精選など、さらなる工夫が必要である。
地歴公民	授業を通して生徒の興味・関心を高め、生徒の主体的な学びにつなげる。 SDGsをはじめとする現代の諸課題について考察する態度を養う。 希望進路を実現させるための学力を育む。	・ICT・視聴覚教材の学習指導計画に基づく効果的・発展的な活用(A: 予定通り実施できた B: 毎月実施 C: 毎学期実施) ・JICAエッセイコンテストに向け、公共の授業内でSDGsを取り扱い、賞を受賞する。(A: 個人入賞した B: 学校表彰された C: 全員が参加した) ・教科内での授業研究の実施(半数以上の教員が A: 毎月実施できた B: 学期に1回 C: 授業公開中に1回) ・進学講習の実施(進学講習受講者の模試偏差値(全国偏差値)・共通テストの平均が A: 偏差値60・得点75 B: 偏差値55・得点68 C: 偏差値50・得点60)	B ・教室のプロジェクター等を用い、計画的にICTの活用をすることができた。 ・今年度のJICAエッセイコンテストは事前指導を行った上で長期欠席生徒以外提出することができ、特別学校賞を受賞した。 ・授業公開期間中には授業見学はできたが、期間外での教科内での授業交流はできていない。 ・2年次からの継続した個別指導により国公立大学合格を勝ち取った生徒や、2年次からの継続した問題演習の結果、希望進路である関関同立の合格を勝ち取った生徒もいた。効果的な手法は教科内で共有しつつ、来年度につなげたい。
数 学	基礎的な数学の学力を確実に身につけさせ、学んだ知識を活用して問題を解決する力を養成する。	・毎授業の改善やテスト前の補充、小テストの実践などで基礎的な学力を確実に身につけさせる。 ・定期テストに知識を活用する問題を出題し、その対策を通して応用する力を身につけさせる。 ・ICTを活用した創造的な授業の実現を目指す。	B ・授業改善については、公開授業等で取り組み中である。基礎学力については、夏季休業中・テスト前などで補習を実施している。 ・応用力については、教員間で情報を共有しながら、生徒の実態を考慮して考查問題の出題の工夫などで進めているところである。 ・ICTの活用、観点別評価、新教育課程にともなう授業の進め方が課題である。今後、議論を深めていきたい。
理 科	科学的な自然観や考え方を身につけ、自然の事物・現象に主体的に関わり、科学的に探究しようとする生徒を育てる。	・ICT機器を積極的に活用し、授業において生徒の理解を促進できる方法について研究し、授業改革を実行していく。 ・感染症予防を徹底しながら、実験やグループ活動の機会を設け、周囲と関わりながら他者と協議し、課題を解決する姿勢を身につけさせる。	B 実験やグループ活動については、感染拡大の状況下の時期もあったが、工夫しながら実施することが出来た。今後については、実験方法なども再検討しながら機会を増やしていきたい。 また、ICT活用については、1年生で2学期よりロイロノートなどのアプリを用いるなど授業や課題の提出の場面などで積極的に取り入れており、引き続き授業改革に取り組んでいきたい。
芸 術	芸術の幅広い諸活動を通して、芸術を愛好する心情を育てるとともに、感性を高め、芸術の諸能力を伸ばす。	・新型コロナウイルス感染拡大予防対策を心掛ける中で、表現力、鑑賞力を伸ばすために基礎基本となる技術の習得を重点的に行う。また、ICT機器の効果的な活用方法を工夫しながら、芸術科相互の実践研究の交流を充実させる。	B ・新型コロナウイルス感染拡大予防のため手指消毒の徹底や活動中でのディスタンスに十分留意した上で、各科目とも一定の技術水準への到達をめざす指導を行っている。また生徒一人一人の進捗状況を把握し、個々の感性や能力に応じ適切な指導や助言を適宜取り入れ行っている。特別教室はまだWi-Fi環境が整っていないが、可能な範囲でICTを活用することができている。各科目の発表の場でもある「ひろがる心展」も授業内で科目ごとに時差を設けての鑑賞を行い、充実した交流ができた。
保健体育	『知』『徳』『体』の調和のとれた生徒の育成。健康の保持増進に必要な活動を自主性を持って自ら実践する態度を養う。	・昨年に引き続きコロナ対応を万全にする中で、最も適切な授業内容を設定する。又、全校生徒がスポーツに興味・関心を持てるように創意、工夫した活動を目指す。そして、3年間で計画的なトレーニングを実践しバランスのとれた体力を持ち合わせた生徒を育成する。	B ・コロナ対策を徹底する中で今年度も授業を展開した。マスクの着用場面と熱中症予防を両立する難しさは今後の課題でもある。コロナ禍ではこの2年間実施していなかったバスケットボールを開講した。現在のところ大きな問題は生じていないが、種目選定の問題は今後も慎重にならざるを得ないものだと思える。1年生から実施の新評価は、一学期では大きな問題はなかったが、改良していく部分はあるかもしれない。
家 庭	自立した生活者として男女が協力して家庭・社会を築くための資質・能力を育成する。生活の中から問題を見だし、生涯を見通して課題を解決する力を養う。	・「みらいを明るくできる人」を育成するため、「持続可能な社会をつくる暮らしの担い手になる」をテーマに教科指導を行う。 ・感染対策に十分に考慮した上で、知識と技術を総合的に習得させ、生活課題を主体的に解決するとともに、自分の考えを他者と共有することで考えを深めさせる。 ・ICTを活用し生徒の理解を促進させる。	B ・生活設計を基盤にして各領域を展開し、SDGsを身近に感じる取組や伝統的な生活文化に関わる実習、子育て理解教育等により、生活の諸課題について、生涯を見通した課題解決力を養えた。 ・成年年齢引き下げをふまえ、契約にかかわる関連法律並びに消費者保護等の消費者教育により、消費者としての自覚を養った。 ・ICTの活用並びにワークシート併用によるフィードバック、グループワーク等により、生徒の理解を促進できた。
英 語	英語によるコミュニケーション能力を強化するための授業改善の取組を行うとともに、ipad等機器を用いた授業を創意工夫する。	・全学年の4技能のテストを以下のとおり実施する。 ・リーディングテスト(初見)は年間4回以上 ・リスニングテスト、スピーキングテスト、ライティングテストは各々年間2回以上 ・CAN-DOリストを見直し、本校生徒の実態に合った目標を設定し、目標達成を目指す。 ・英語科教員間での研修や授業見学などを通して、新しい授業を考えていく。	B ・4技能テストについては、各学年とも計画通り実施し、生徒の学力向上につながった。 ・各学年で話し合いを行い、アイディアを出し合いながら授業改善に努めた。 ・ipadの活用については、単語の自学自習に用いたが、授業中の有効活用ができず、来年度に向けての課題となった。 ・CAN-DOリストの見直しについては、時間をかけて話し合う必要があり、今年度はできなかった。

情 報	高度情報化社会における課題を認識し、情報機器を活用した解決の方法や情報モラルについて考えさせる。	・新しい情報活用手段のあり方について、主にPCとiPadを活用して情報活用を行う。 ・PCやiPadを用いて文書作成・表計算ソフト等を活用し技術向上を目指す。 ・プログラミング学習を通して、客観的に物事を見る力や効率よく問題を解決する力の向上を目指す。	B	・情報活用手段のあり方について、PCを活用して取り組むことができた。 ・PCを用いて文書作成・表計算ソフトを用いて課題に取り組み、全体的に技術向上が見られた。 ・欠席等により課題の作成に間に合わない生徒に対して、どのように対応を行うかが課題である。コンピュータ室のPCだけでなく、iPadを用いて自宅で取り組むなど、タブレット端末を積極的に用いていきたい。
総合的な探究の時間	実社会や実生活と自己との関わりから見出した問いに取り組み、新たな価値を創造し、よりよい社会を実現しようとする態度を養う。	・「国際教育」と「地域連携」を軸としたPDCAサイクルを企画会議と担当者会議により組織的に行う。 ・1、2年次の学習が、3年次の進路選択からの進路実現となるよう系統立てた実践を目指す。 ・情報収集だけにならない「つながる」「発信する」視点でのICT機器の活用を研究し、担当者間での情報共有を図る。 ・外部講師や大学等機関と連携をとり、学習内容に合わせた指導体制を確立する。	B	・各学年の企画会議を軸に、生徒の実態に合わせ年間指導計画に沿って内容を工夫し授業が進められた。大学や地域との連携も昨年度以上に活発となり、特に京都市文科大学の学生による授業サポートもしていただいたことにより、生徒の学習が深まった。 ・アンケートやインタビュー等の手法を取り入れ、情報収集とその活用の授業を行えた。 ・これまでの3年間の取組を踏まえ、授業のただけで終わらない、生涯にわたり自らが主体的に探究できる態度・姿勢の育成のための指導方法についての検討が、次年度の課題となる。
学校運営協議会による評価	○概ね計画どおりに教育活動が行われ、それぞれの成果も見られる。 ○ICTの活用を推進、成人年齢の引き下げに対応する主権者教育の推進を図ることが大切である。			
次年度に向けた改善の方向性	○ICTを活用した授業の充実を一層推進するとともに、情報リテラシー、モラルを含む教育の推進を図る。 ○成人年齢の引き下げに対応する主権者教育の推進を図る。			